

例会佳句

謹賀新年……陰曆では正月を立春（二月四日頃）をもとに定めていたので、正月は春を迎えることと一致していた。陽曆になってほぼ一か月も前に新年を迎えることになった。季節感のズレがあるが、新年に結びついた迎春の気分は変わらず、新年を新春ともいう。

若水は元旦に汲む水という。歳神に供え、初手水に用い、雑煮などをつくるためだ。水である。元旦の深夜、一、二時に年男が身なりを改め、厳粛な気持ちになり、井戸や川などに若水を汲みに行くのを若水迎えという。水道ができて水汲みは楽になったが、水への感謝の念は持ちたいものである。

年賀状は遠隔の友人等と新年の挨拶を交わすことができる。元旦にどさりと届く年賀状を見るのは楽しい。思いがけない人から年賀状がきてうれしい気持ちになる。年に一度だけ年賀状で音信を続けるのも意味のあることである。

雑煮は正月を祝う餅をあつものにしたもの。雑煮を食べ、一家揃って無病息災であることを願い、新年を迎えた喜びを感じる時である。関東では焼いた切餅に澄まし汁、関西は焼かない丸餅で白味噌仕立て。地域により調理方法が違い特色がある。

（四季の会 世話人）
（「シツク」の俳句は全員互選の上位句）

七五三赤飯ふっくら炊き上がる
命日を過ぎて狭庭の返り花
手拍子を誘う法被や酉の市

神奈川 中本 萬里

鈴の緒へ爪先立ちの七五三
担がれて熊手のおかめ月仰ぐ
煙出しのけむり這ふ庫裏初紅葉

宮城 鈴木 わかば

手拍子におかめ微笑む酉の市
青空に黄色い声や赤い羽根
畦道で三時のおやつ蒔田かな

東京 坂本 州賢

観覧車仰ぐ蒼天秋惜む
一村の平家伝説蕎麦の花
七五三話に照れる孫二十歳

兵庫 高森 功一

どの子にも日ざしあまねし七五三
人肌の爛のよろしき走り蕎麦
そこまでの見送り長し夕月夜

大阪 加藤 あや

晩学は道半ばなり秋灯下
山門をくぐり結界木の実雨
七五三男の子女の子も女坂

千葉 安彦 緑泉

手締め之音響く人波西の市
お祓いに神妙な顔七五三
木犀の香満つ庭深呼吸

東京 坂本 秀浩

夕花野明日の好天予感せり
大切に育てし林檎出荷の日
残暑厳し路面電車の軋みかな

千葉 加藤 浩雲

永年の任離れるや冬日和
富士麓大甘藷高く掘り上げし
コロナ禍や笑う人無き熊手市

東京 北詰 南風

初御空多摩の連山輝けり
寒雀群れて夕日の鬼瓦
呼び声も里の訛や飾り売り

神奈川 森 京子

境内に手締が響く酉の市
夜も更けて焼芋の声近づけり
大きめの新調服で七五三

東京 中西 麦人



水道・下水道人の俳句の会 「四季の会」 入会歓迎

申込先 〒102-0074 東京都千代田区九段南4-8-9
日本水道会館内 日本水道新聞社気付
「四季の会」世話係 まで